



Title	大学生の孤独感について
Author(s)	太田, 夏来
Citation	生老病死の行動科学. 2004, 9, p. 29-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8111
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学生の孤独感について

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 太 田 夏 来

Abstract

The main focus of this research is the loneliness, which has gathered a large attention as one of the problems in contemporary society. This research focused on sibling positions and structures as important factors related to loneliness. Besides, the research regarding the relationship between loneliness and lifestyles was also conducted. The questionnaire, which has involved was fulfilled by the Revised UCLA Loneliness Scale and questions about the sibling structures and lifestyles, was found to be possibly 80 university students. As a result, loneliness affected by having or not having siblings to some extent although sibling positions did not play a pivotal role to this. In addition, external factors, like lifestyles, did not have a direct influence on loneliness, but internal factors, such as senses of fulfillment or self-confidences, had effects on loneliness.

key words : loneliness, the sibling structure, the sibling position, lifestyles

I 序 論

孤独感は、現代社会のかかえた個人的、社会的な重要な問題のひとつである（工藤・西川, 1983）。孤独感と密接に関連のある問題としては、アルコール依存症（Nerviano & Gross, 1976）、自殺（Jacobs, 1971; Wenz, 1977）、抑うつ（Leiderman, 1969; Ortega, 1969）青年の非行（Brennan & Auslander, 1979）や老人問題（長田, 1981; Rubinstein, Shaver, & Peplau, 1979）などが指摘されているが、これまで、これらの背景に存在する心理的なひとつの要因として言及されてきたに過ぎない（工藤・西川, 1983）。また、孤独感について検討するうえで青年期は特に重要な時期であり、多くの研究が、青年期は他のどの年齢層より孤独を頻繁に、また強く感じる時期であると述べている（Buhler, 1969; Ostrov & Offer, 1978; Weiss, 1973; Wood & Hannell, 1977）。

孤独感の研究には性格特性や対人行動などとの関連がよく取りあげられているが、孤独感を生じさせるひとつの要因として社会的な関わりが考えられる。まず、社会的関わりや対人行動に大きく関わるものには社会的スキルがあげられる。社会的スキルの身につけていない人は満足いく社会的関係を作り上げることは難しいとされ、青年期においても社会的スキルの欠如は孤独感の原因となっていることが指摘されている（Brennan & Auslander, 1979）ほか、児童期から老年期においてまで、社会的スキルと孤独感との関連は多く指摘されている（Jones, Hansson & Smith, 1980; Perlman, Gerson & Spinner, 1978; Rubin, 1980）。人間は幼い時期から周囲と関わるためにいろいろなスキルを習得する必要があるが、習得する機会が少ない場合それらのスキルが欠如、もしくは不足してしまうことが考えられる（Putallaz & Gottman, 1981; Rubin, 1980）。Rubin (1980) は、そのような状況やスキルの不足から周囲との関係がうまく作れず孤独感が生じるとしている。このように、人は周囲との人間関係から社会的スキルを習得していくと考えられているが、これをもっとも身近な人間関係である家族に当てはめると、きょうだいという人間関係もまたこの意味において重要な役割を果たしてい

と思われる。

例えば、きょうだいを持つ者には家庭において親子関係とは違う子供同士の関わりが生じているが、きょうだいのいない一人っ子の場合、家庭の中ではいつまでも大人と子供の関係しか存在せず、きょうだいを持つものに比べると社会的経験の不足が生じていると考えられる（大淵, 1998）。また、一人っ子の場合、きょうだいを持つ者に比べ親や周囲の愛情を一身に受けて育つことになりやすい。親の育児態度研究（Maccoby & Martin, 1983）によると、親の過干渉・過保護は一般的に子供を神経質で依存的にする傾向があることが報告されているが、このようなことから、一人っ子の方がきょうだいを持つ者に比べ、社会の中での対人関係において孤独を感じやすいパーソナリティを持つと考えられる。

きょうだいを持つ者について見てみると、長子が経験する初めての人間関係は自分より圧倒的に権力を持つ親との関係に限定されるのに対し、次子が経験する人間関係は親だけでなく自分より少しだけ大きい長子との関係も含まれる（吉田, 2001）。また、出生順位に関しては性格特性の研究は多く行われているが（Adler, 1927；福田・依田, 1986；浜崎・依田, 1985；飯野, 1985, 1986, 1988, 1989；Kagan, 1971；Toman, 1976）、なかでもKagan（1971）の研究によって長子の性格特徴のひとつとして不安傾向が指摘されていることに注目したい。長子が不安を持ちやすいことはShachter（1959）の行った不安と親和性についての研究でも示唆され、長子の親和傾向の強さは不安によるものであると説明されているが、長子が不安を感じやすく親和傾向も高いとするならば、他者との関係において情動的孤独感を抱きやすくなると思われる（Brennan, 1982）。

このように、対人関係の基本である家族内の関係において一人っ子と兄弟をもつ者、また兄弟の中でもその順位によって異なる性格の特徴が指摘されていることから、出生順位やきょうだい構成において孤独感に差が見られるのではないかと考えた。

また、孤独感を左右する要因としては社会的接触も注目すべき点であると考えられる。これに関しては、未亡人や離婚した成人では孤独な人ほど社会的活動が少なく（Jones, et al., 1980）、年輩の孤独な人は友人と接触することが少ないことが報告されている（Perlman, et al., 1978）ほか、孤独な大学生は孤独でない学生に比べて社会的接触が少ないという報告がいくつか見られる（Jones, et al., 1980；McCormack & Kahn, 1980；Russell, Peplau & Cutrona, 1980）。青年期における孤独感は、学校の社会的活動や学外活動への参加の少なさ、仲間や親と一緒に過ごす時間の短さ、一人でいる時間の多さ、社会的組織やクラブのメンバーになる経験の少なさなどに関連しているといわれている（Brennan & Auslander, 1979）。大学生は、ほとんど初めて親元を離れ一人暮らしや下宿をする機会が与えられる時期だが、これらの先行研究をふまえ、大学生の孤独感を考えるうえでは生活形態の違いも重要な要因となるのではないかと考えた。

これらのことから本研究では、孤独感を生じさせる要因としてきょうだい構成と出生順位、社会的接触に注目し、関連を見出すことを目的とした。

II 方法

1. 調査対象

関西にある私立大学に通う19～29歳の男子学生16名、女子学生64名の計80名（平均年齢20.86歳、SD=2.29）を対象とした。

2. 質問紙の構成

孤独感を測定するため 20 項目からなる Russell, et al. (1980) の改訂版 UCLA 孤独感尺度を使用した。回答法は「あてはまる」(4 点)、「ややあてはまる」(3 点)、「ややあてはまらない」(2 点)、「あてはまらない」(1 点) の 4 件法で回答する。20 項目あるうち逆転項目は 10 項目であり、その場合は 4=1、3=2、2=3、1=4 として計算する。評定としては合計得点が高いほど孤独を強く感じていると解釈される。

さらに兄弟の有無・出生順位、社会的接触との関連を調べるために、各自の兄弟構成についての記入欄と、「一人暮らしをしている」、「クラブ・サークル活動をしている」、「現在学生生活が充実している」、「以前より自分に自信がなくなったと感じる」という、現在の生活環境等を問う自作の質問を設け、それぞれ、はい・いいえで回答を求めた。

3. 手続き

対象者に質問紙を配布し 10～15 分で各自に回答を求め、その場で回収し、結果を集計した。調査は 2002 年 11 月下旬から同年 12 月上旬にかけて実施した。

III 結果と考察

1. きょうだい構成と孤独感の関係

1-1. きょうだいの有無との関係

きょうだいの有無によって孤独感に差が出るのかを調べるため、一人っ子 (N=8) ときょうだいあり (N=72) との 2 群に分けて Mann-Whitney の U 検定を行った。その結果、この 2 群の間に有意な傾向が見られた (U=181.5, $p < .10$)。結果は表 1 に示した。

この結果から、一人っ子がきょうだいを持つ者に比べ孤独を感じやすい傾向があるということが判明した。きょうだいの有無は、幼少期の社会的スキルの獲得段階やパーソナリティの形成段階における社会的経験の頻度においてはその差異が認められるが、大学生のように成長して家庭以外の人間関係が増えていくと、幼少期に比べきょうだいを持つ者との差位もあまり見

表 1 各変数における検定結果

変数		N	孤独感得点 M S D		検定値
きょうだい	あり	8	37.63	8.90	181.5 ¹⁾
	なし	72	32.82	7.58	
出生順位	長子	25	34.88	7.90	1.64
	中間子	15	32.73	7.91	
	末っ子	32	31.25	7.01	
生活形態	一人暮らし	22	32.95	8.41	-0.23
	一人暮らしでない	58	33.43	7.62	
クラブ活動	参加している	50	33.62	7.53	0.46
	参加していない	30	32.77	8.32	
生活の充実感	充実している	63	32.49	7.64	-1.77 [†]
	充実していない	17	36.29	7.87	
自信の有無	自信がある	28	35.82	7.78	2.15 [*]
	自信が無い	52	31.94	7.53	

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$

¹⁾ Mann-Whitney の U 検定

られなくなっていくと考えられる。しかし、きょうだい関係というのは友人関係に見られる横の関係のみではなく、親子関係に見られる縦の関係が合成されたななめの関係であるとも言われているように（依田，1978）独特なものであるゆえ、きょうだいを持つ者と一人っ子との差異は成長しても全くなくなるというわけではないということが言えるのではないだろうか。

今回の調査では一人っ子の割合が全体の1割程度と低く、十分なサンプル数ではなかったため、標本数を増やしさらに傾向を検討してみることも必要である。

1-2. 出生順位との関係

出生順位による孤独感の差を調べるため、長子（ $N=25$ ）・中間子（ $N=15$ ）・末っ子（ $N=32$ ）の3群について分散分析を行ったが、有意差は見られなかった（ $F(2, 69)=1.64$, n.s.）（表1参照）。

このことから、孤独感には特に出生順位に直接左右されるのではないということがわかった。出生順位は性格の形成や特性などに関わる要因として取りあげられることはあるが、親子関係や母子関係をとりあげたものに比べると、出生順位を中心として扱った研究はあまり見られない。その中で、Shachter（1959）の行った不安と親和性についての研究では長子の親和傾向の高さが示唆されているが、親和傾向の高さと孤独感の関連を検討することも必要であったと思われる。

また、孤独感を抱きやすいなどの性格特性を形成する要因としての出生順位や、大学生という特徴を活かした対人関係の社会的スキルなどにも注目したうえで、さらにきょうだい構成との関連を見てみるのも興味深いと思われる。

2. 生活環境等と孤独感との関係

2-1. 生活形態との関係

生活形態による孤独感の違いについて、一人暮らしをしている（ $N=22$ ）・一人暮らしをしていない（ $N=58$ ）の2群に対し t 検定を行った。その結果、この2群の間に有意差は見られなかった（ $t(34.9)=-0.23$, n.s.）（表1参照）。

一人暮らししかそうでないかでは社会的接触の頻度に違いがあり、一人暮らしをしている人のほうが得点は高いと予想したが、両者の得点にも差は見られなかった。これについては、一人暮らしの場合家族のように一緒に住む相手がいなくても、好きな時に友人を呼んだり連絡をとったりできるなど自由に時間を使えるので、家族とは離れていてもそのぶん友人とより手軽に、より親密に付き合えるからではないかと考えられる。また、今回の調査対象者は大学に入学して一年以上経っている学生のみであったので、上記のような人間関係や人との関わりの方法をすでに習得していることも考えられる。新入生を対象とした研究では Russell, et al.（1980）が、一般的に新入生の不安や孤独は一年間でほぼ適応されると報告しているが、適応できない学生について孤独感、自殺やアルコール中毒、中退などとの関連も指摘されている（Lamont, 1979; Newman, 1971）。生活形態のみではなく、他者との接触の頻度や種類、その満足度などとの関連を今後検討する必要があると考えられる。

2-2. クラブ活動への参加の有無との関係

クラブ活動への参加の有無による孤独感の違いについて、参加している（ $N=50$ ）・参加し

ていない (N=30) の 2 群に対して t 検定を行った。その結果、この 2 群の間に有意差は見られなかった ($t(56.4) = 0.46, n.s$) (表 1 参照)。

これについても生活形態と同様に、社会的関係を求める領域や時間の使い方などに個人差があるためではないかと思われる。中学や高校のように、大半の生徒がクラブに参加することが当然のような環境では両者の差も見られたかもしれないが、大学生活においてはアルバイトや学外の活動などへの参加の可能性も十分にあると考えられるので、孤独感に影響する社会的要因については生活形態とも絡めてさらに詳しい状況を追求することが重要であると考えられる。

2-3. 生活の充実感との関係

生活に対する充実感による孤独感の差について、充実している (N=63) ・充実していない (N=17) の 2 群に対し t 検定を行った。その結果、この 2 群の間には有意傾向が見られた ($t(24.8) = -1.77, p < .10$) (表 1 参照)。

生活が充実していると感じているかいないかのみを問う質問であったが、生活が充実していると感じている人は孤独感をあまり抱いていないという傾向があることがわかった。この質問のみでは生活のどの面が、どういう風に充実しているのかということまでは判らないが、外的な要因よりも内面的に充実していると感じることができれば、孤独感を抱くことは少なくなるということが示唆された。生活の充実度と孤独感との関連については、生活の多方面から充実度を測定できる尺度などを用いてさらに深く検討することが必要である。

2-4. 自信の有無との関係

自信の有無について、以前より自信がなくなったと感じる (N=28) ・感じない (N=52) の 2 群に分けて t 検定を行った結果、この 2 群の間には有意差が見られた ($t(53.8) = 2.15, p < .05$) (表 1 参照)。

これも外的な要因とは関係なく主観的な感覚を問う質問であったが、以前より自信がなくなったと感じると答えた人は孤独感が高いということがわかった。この質問項目は、「以前より」とつけているため、単に今現在自分に自信を持っているかどうかを問う質問よりも、大学生活でのこれまでの適応に関する評価の影響もある程度加わっているのではないかと考えられる。この結果は、大学生活というのは、家族や高校などの小さな社会において形成してきた社会的関係や自分の地位などをそのまま持ち込むことはできず、多くの領域において一からやり直すことを必要とされるので自信の喪失や孤独を招きやすいとする Cutrona (1982) の指摘とも一致しているといえる。

IV まとめ

今回の調査では大学生の孤独感ときょうだい構成との関連について調査を進めたが、孤独感と出生順位との関係はほとんど見られなかった。幼児期など、中心となる人間関係のほとんどが家族との関係である時期に比べ、大学生ともなると家族以外の人間関係や社会的要因の影響がかなり強くなってくると考えられる。大学生の孤独感にきょうだい構成や出生順位が直接関わってくることはないという可能性もあるが、親和性や劣等感の強さ、自尊心の高さなど、性格の特性として関わってくることは十分考えられる。今後さらに具体的な要因に絞って、孤独感との関連を見出すこともできるだろう。

また、孤独感は生活形態などの外的な要因ではなく、主観的な、内的な感情によって左右されるものであることが示された。これについては今後さらに詳しい要因や個人差について検討する必要がある。

今後の課題としては、本研究ではサンプル数が少なかったため、さらに範囲を広げて調査する必要がある。また、対象者も関西の大学生のみに偏っているため、範囲を広げて調査する必要があると思われる。それによってより明確な結果と孤独感に差違をもたらす要因を同定できることが予想される。

文献

- 青柳肇・杉山憲司(編著) 1996 きょうだい関係 パーソナリティ形成の心理学 福村出版 pp.133-142.
- Adler, A. 1927 "Menschenkenntnis". Hirsh.
- Brennan, T. & Auslander, N. 1979 *Adolescent loneliness: An exploration study of social and psychological pre-dispositions and theory*. Unpublished manuscript. Behavioral Reserch Institute, Boulder, Colorado.
- Buhler, C. 1969 Loneliness in maturity. *Journal of Humanistic Psychology*, 9, 167-181.
- 福田孝子・依田明 1986 ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係(2) —幼児期・児童期におけるきょうだい関係認知の発達的变化 横浜国立大学教育学紀行, 26, 143-155.
- 浜崎信行・依田明 1985 出生順位と性格(2) —3人きょうだいの場合 横浜国立大学教育学紀行, 25, 187-196.
- 飯野晴美 1985 きょうだい関係 日本心理学会第49回大会発表論文集, 645.
- 飯野晴美 1986 きょうだい関係2 日本心理学会第50回大会発表論文集, 521.
- 飯野晴美 1988 きょうだい関係3 日本心理学会第52回大会発表論文集, 99.
- 飯野晴美 1989 きょうだい関係4 日本心理学会第53回大会発表論文集, 99.
- Jacobs, J. 1971 *Adolescent suicide*. New York: Wiley.
- Jones, W.H., Hansson, R.O., & Smith, T.G. 1980 *Loneliness and love: Implications for psychological and interpersonal functioning*. Unpublished manuscript. University of Tulsa.
- Kagan, J. 1971 "Personality Development", Harcourt Brace Jovanovich.
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(I) *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 22, No2, 99-108.
- Lamont, L. 1979 *Campus shock*, New York: Dutton.
- L.A., ペブロー・D, パールマン(編) 1988 孤独感の心理学 誠信書房
- Leiderman, P.H. 1969 Loneliness: A psychodynamic interpretation. In Shneidman, E.S. & Ortega, M.J. (Eds.) *Aspects of depression* Boston: Little, Brown.
- Maccoby, E.E. & Martin, J.A. 1983 Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. Mussen, P.H. (Ed), "Handbook of child psychology. Vol. 4, J. Wiley.
- McCormack, S.H. & Kahn, A. 1980 *Behavioral characteristic of lonely and nonlonely college student*. Paper presented at the annual meeting of the Midwestern Psychological

- Association, St. Louis.
- 長田久雄 1981 老人の孤独に関する心理学研究 老年社会科学, 111-124.
- Nerviano, V.J. & Gross, W.F. 1976 Loneliness and locus of control for alcoholic males: Validity against Murray need and Cattell trait dimensions. *Journal of Clinical Psychology*, 32, 478-484.
- Newman, F. 1971 *Report on higher education*. Washington, D. C.: Department of Health, Education and Welfare. U.S. Government Printing Office.
- 大淵憲一 1998 きょうだい関係の心理 岡道哲雄(編) 家族心理学入門 倍風館 pp.55-66.
- Ortega, M. 1969 Depression, loneliness, and unhappiness. In Shneidman, E. & Ortega, M. (Eds.) *Aspects of depression*. Boston: Little, Brown.
- Ostrov, E., & Offerr, D. 1978 Loneliness and the adolescent. In Feinstein, S (Ed.), *Adolescent psychology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Perlman, D., Gerson, A.C. & Spinner, B. 1978 Loneliness among senior citizens: An empirical report. *Essense*. 2, 239-248.
- Putallaz, M., & Gottman, J., 1981 Social skills and group acceptance. In Asher, S. R. & Gottman, J.M. (Eds.), *The development of children's friendships*. New York: Cambridge University Press.
- Rubin, Z., 1980 *Children's friendships*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Rubinstein, C., Shaver, P., & Peplau, L.A. 1979 Loneliness, *Human Nature*, 59-65.
- Russell, D., Peplau, L.A. & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Schachter, S. 1959 *The psychology of affiliation*. Stanford University Press.
- Toman, W. 1976 "Family constellation", Springer.
- Weiss, R.S. 1973 *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Wentz, F.V. 1977 Seasonal suicide attempts and forms of loneliness. *Psychological Reports*, 40, 807-810.
- Wood, L.A., & Hannell, L. 1977 *Loneliness in adolescence*. Unpublished manuscript, University of Guelph, Ontario, Canada.
- 吉田俊和 2001 他人との付き合い 山岸俊男(編) 社会心理学キーワード 有斐閣 pp.136-148.
- 依田明 1978 家族関係の心理 有斐閣